



弁太陽病脉証并治上第五 合一十六法、方一十四首。

太陽病の脉証並びに治を弁ず上第五 合して十六法、方一十四首。  
太陽病の脈と証および治療を弁別する上第五 全部で十六法、処方十四首。

- 太陽中風、陽浮陰弱、熱發汗出惡寒、鼻鳴乾嘔者、桂枝湯主之。第一。五味。前有太陽病一十一証。
- 太陽病、頭痛發熱、汗出惡風者、桂枝湯主之。第二。用前一方。
- 太陽病、項背強几几、反汗出惡風者、桂枝加葛根湯主之。第三。七味。
- 太陽病下之後、其氣上衝者、桂枝湯主之。第四。用前一方。下有太陽壞病一証。
- 桂枝本為解肌、若脉浮緊、發熱汗不出者、不可与之。第五。下有酒客不可与桂枝一証。
- 喘家、作桂枝湯、加厚朴杏子。第六。下有服湯吐膿血一証。
- 太陽病、發汗、遂漏不止、惡風小便難、四肢急、難以屈伸、桂枝加附子湯主之。第七。六味。
- 太陽病、下之後、脉促胸滿者、桂枝去芍藥湯主之。第八。四味。
- 若微寒者、桂枝去芍藥加附子湯主之。第九。五味。

太陽病、八九日如瘧狀、熱多寒少、不嘔、清便自可、宜桂枝麻黃各半湯。第十。七味。

太陽病、服桂枝湯、煩不解、先刺風池風府、却与桂枝湯。第十一。用前第一方。

服桂枝湯、大汗出、脉洪大者、与桂枝湯。若形似瘧、一日再發者、宜桂枝二麻黃一湯。第十

二。七味。

服桂枝湯、大汗出、大煩渴不解、脉洪大者、白虎加人参湯主之。第十三。五味。

太陽病、發熱惡寒、熱多寒少、脉微弱者、宜桂枝二越婢一湯。第十四。七味。

服桂枝、或下之、頭項強痛、發熱無汗、心下滿痛、小便不利者、桂枝去桂加茯苓白朮湯主之。

第十五。六味。

傷寒脉浮、自汗出、小便數、心煩、微惡寒、脚攣急、与桂枝、得之便厥、咽乾、煩躁、吐逆、

作甘草乾薑湯与之。厥愈、更作芍藥甘草湯与之、其脚伸。若胃氣不和、与調胃承氣湯。若重

發汗、加燒針者、四逆湯主之。第十六。甘草乾薑湯、芍藥甘草湯並二味。調胃承氣湯、四逆湯並三味。

1

太陽之為病、脉浮、頭項強痛而惡寒。太陽の病たる、脉浮に、頭項強痛して惡寒す。

注釈

① 頭項強痛——頭痛して項がこわばる。

訳

およそ太陽経に病変が生ずれば、脈は浮となり、頭が痛み、項部がこわばって惡寒する。

提要

本条文では、太陽病の脈と証の特徴を要約して述べており、太陽病表証の提綱とみなされる。

2

太陽病、發熱、汗出、惡風、脉緩者、名為中風。太陽病、發熱し、汗出で、惡風し、脉緩なるものは、名づけて中風と為す。

注釈

① 惡風——風をいやがること。その特徴は、冷い風に当たると不快に感じるが、冷い風に当らなければ何ともない。

② 中風——風にあたる、風に傷害されることで、表証の一つ。口眼歪斜や半身不随を伴う中風のことではない。

訳

太陽病に罹って、發熱があり、汗が出て、風に当たると寒気がし、そして脈が緩であるものを、中風と呼ぶ。

提要

本条文では、太陽病の中風証の脈象と主要証候を述べている。

太陽病、或已発熱、或未発熱、必<sup>①</sup> 太陽病、或いは已に発熱し、或いは未だ発熱せず、悪寒、体痛、嘔逆、脉陰陽俱緊者、必ず悪寒し、体痛み、嘔逆し、脉陰陽俱<sup>②</sup> 名為傷寒。  
緊なるものは、名づけて傷寒と為す。

## 注釈

① 脉陰陽俱緊——ここでは、寸関尺の三部の脈象がすべて浮緊であることを指す。  
② 傷寒——証候名。傷寒には広義のものと狭義のものとがある。ここでは、外感の風寒の邪によつておこつた狭義の傷寒を指して言っている。

## 訳

太陽病に罹り、或いはもうすでに発熱しており、或いはまだ発熱はしていないが、必発の証候として、悪寒、身体痛み、悪心嘔吐があり、脈は寸関尺の三部すべてに緊象がみられるものを、傷寒と呼ぶ。本条文では、太陽病の傷寒証の脈象と主要証候とをあげている。

## 提要

傷寒一日、太陽受之、脉若静者、傷寒一日、太陽之を受け、脉若し静かなるものは、為不伝。<sup>②</sup> 頗欲吐、若躁煩、脉数急、伝わらずと為す。頗る吐せんと欲し、若しくは、為伝也。  
は躁煩し、脉数急なるものは、伝わると為すなり。

## 注釈

① 脉若静——「若」は「もし」。「静」とは、もともとの脈象が持続していることを言つたものである。すなわち、太陽病で表証が現れている時に、脈象がまだ変化していない場合のことを指している。  
② 伝——伝わる。すなわち、此の経に在つた病邪が彼の経に伝わることの意味する。

## 訳

傷寒の病では第一病日に、まず太陽経が病を受けるのだが、もし脈象に変化がない場合は、病邪はまだ太陽経に停まって他の経には移っていない。もし患者は悪心嘔吐が激しく、或いはいらいらして落ち着かず、脈象が数で急ならば、これは病邪はすでに他の経に移つたことを物語っている。次の条文のところでまとめて記す。

## 提要

傷寒二三日、陽明少陽証不見者、傷寒二三日、陽明少陽の証見れざるものは、伝為不伝也。  
わらずと為すなり。

## 注釈

① 傷寒二三日——『素問・熱論』の記載によると、一日は太陽、二日は陽明、三日は少陽、四日は太陰、五日は少陰、六日は厥陰がそれぞれ病む。この記述にもとづくと、傷寒二三日とは陽明と少陽が邪を受ける時期である。本篇には、傷寒一日で伝わるもの、傷寒二三日でも伝わらないもの、太陽病になつて八九日しても邪は依然として表にあるものが記されている。これらから、伝わるか否かということ、時間日数とはあまり関係がないと考えられる。また、伝わつたか否かを弁証する鍵は脈証の変化にある。

## 訳

太陽病の傷寒証が第二或いは第三病日になつても、まだ陽明証も少陽証も現れていないなら、病邪はまだ他経に移っていない。

## 提要

以上の二条では、脈と証から伝経の有無を判断することを述べ、また、脈診の重要性を喚起している。伝経を予知して病邪の進展の方向を知ることが、臨床上極めて重要である。